

研究タイトル:

## 古代エジプトの社会経済構造についての研究



氏名:	遠藤 颯馬 / ENDO Soma	E-mail:	endos@toyota-ct.ac.jp
職名:	講師	学位:	修士(歴史学)
所属学会・協会:	日本西洋史学会、日本オリエント学会		
キーワード:	歴史学、西洋史、古代エジプト史		
技術相談 提供可能技術:	<ul style="list-style-type: none"> <li>・西洋史</li> <li>・古代エジプト史</li> </ul>		

### 研究内容: 古代エジプト新王国時代の社会経済構造の歴史学的研究

#### <概要>

パピルスやオストラコンなどの文献史料の考察から、古代エジプト新王国時代の農業経営の実態を解明することによって、当時の社会経済構造を検討する。

#### <研究内容>

本研究は、古代エジプト新王国時代の社会経済構造を解明するために、農業経営に焦点をあてる。古代エジプト史の研究は、現存する史料が多い、宗教史や政治史に関心が長い間集中してきた。しかし、20世紀後半より、当分野における社会史の隆盛によって、極端に中央集権化した官僚国家という古代エジプトの社会像の見直しが急速に進むことになった。近年では、第三中間期などの政権が不安定な時期は言うまでもなく、政治的に安定していた新王国時代においても、王が地方の有力者への寄進を通して、地方との結びつきを強固にし、懐柔を図っていたことが明らかにされている。

社会経済史の中心的な課題のひとつとして、農業経営の研究がある。古代エジプトでは、ナイル川の氾濫を利用した灌漑農業がもたらす高い生産力が、社会や経済を支える基盤となっていた。しかし、その重要性にもかかわらず、実態に関しては不明瞭なことが多い。その理由としては、差し当たり二つあげることができる。ひとつに、文献史料の解釈に意見の一致を見ていないこと、もうひとつに、考古学及び文献史料の情報を包括的に用いた研究がなされていないことである。そこで、本研究では、文献史料の検討に重きを置きつつ、補完的に考古学の成果を参照することで、当時の農業経営を復元することを試みる。

ここで、本研究のアプローチが、従来の我が国の古代エジプト史研究とは、全く異なることを強調しておきたい。本研究は、考古学の知見を補完的に用いるが、あくまで文献史料の分析を中心とした歴史学研究と位置づけられる。一方で、我が国では、考古学的手法を用いた研究が主流であった。古代エジプト史の研究は、世界的には、言語学、歴史学、文化人類学など多様な学術分野からの研究がなされており、我が国の考古学的アプローチ偏重の状況は必ずしも健全であるとは言えない。とりわけ、古代エジプト語の文献史料を用いた研究の活性化が急務であるとの指摘が近年なされている。その点でも、本研究は、我が国の古代エジプト史研究に新たな視点を提供する可能性を秘めていると言えるだろう。

#### 提供可能な設備・機器:

名称・型番(メーカー)	